

氏名 林知弘 学籍番号70906918

ハローワーク被災者特別支援業務者のライフストーリー

―支援の実態と自己の人生の意味づけ

概要

本研究の目的は、東日本大震災以後、復興支援の一環としてハローワーク会津若松で就労支援に携わったある女性が、その体験をもとに自己のライフストーリーをどのように語るのかを記述し、その体験と残りの人生にどのような意味づけをしていくのかということ明らかにすることである。対象は2011年4月から2012年10月まで、ハローワーク会津若松の社員として働いた30歳の女性である。彼女には2回の非構造化面接を通じてデータを収集し、トランスクリプションとしてまとめた。

語られたライフストーリーについては、そのアウトラインを記述した。このライフストーリーには、他者との関係性においてストーリーを語るという、ライフストーリーの発達の様相を見取ることができる。また、ライフストーリーを通じて、他者との関係性のなかで、自己の人生にどのような意味づけを行っていくのかということも示されることとなった。

ライフストーリーの語られ方の分析については、語り手のアイデンティティがライフストーリーの構築過程の中で変容していくことや、会話の中で組織されたカテゴリーによって、語りの内容が規定されていく、意味づけがなされていくことが確認された。以上から、ライフストーリーとは、語り手と聞き手の相互行為による構築作業であるということが示されることとなった。

序論

研究背景

本研究の背景は、2011年3月11日に起こった東北大震災及び二次災害の津波によって引き起こされた東京電力・福島第一原子力発電所の事故を契機としている。福島原発事故は、これまで史上最大の原発事故とされていたチェルノブイリ原発事故（1986年4月）に匹敵するレベル7という評価が与えられるほどのシヴィル・アクシデントを起こした。この大事故によってもたらされた被害は甚大であり、現在でも深刻な問題を我々に突き付けており、事態の進捗状況はよくなっているとは言いがたい。

この福島原発事故によって、改めて戦後日本の国策であった原発推進政策に隠れた「犠牲のシステム」や、支配と服従のシステムの問題が浮き彫りになった。原発立地の推進過

程に露呈される過疎地差別、中央による地方の搾取構造が浮き彫りになり、政府の工作の方法やその内実の構造、そしてその地域に及ぼす影響が徐々に明らかにされつつある。

私は、福島第一原発事故以前は、原発に対する認識は、CO₂削減のための重要な電力供給源というものであった。しかしながら、テレビメディアを通じて福島原発一号機がメルトダウン（炉心溶融）を起こしたことを知り、放射能が施設外へ放出されたということを知って初めて、原子力発電所に対する認識を改めざるを得ない状況に直面したのである。

福島原発1号機のメルトダウンによって、結果的に大量の放射能が放出され、私の故郷がある千葉県北西部も少なからず放射能汚染による被害を受けた。原発事故によって放出された放射能は、風に乗って拡散し、放射能汚染は拡大していった。なかでも千葉県の北西部に位置する、我孫子市、柏市、流山市、野田市は、ホットスポットと呼ばれる、放射能が局地的に集まり高濃度になっている場所が生まれ、少なからず被害を受けた。自分の故郷が被害を受けるということは、事故当時は頭の片隅にも考えてもいなかった。この事実を知った時は、私は感情を揺さぶられ、原発の問題に対して様々な感情が募らせるようになった。以上の経験が、私が原発に関心を強く抱く一因となったといえるかもしれない。

このような経緯から、この研究を行うきっかけになった背景には、原発事故が起こった後、私の実姉であるAが福島県会津若松市のハローワークで就労支援の仕事に携わることを知ったことが挙げられる。幸い会津若松市自体は、強制移住をしなければならぬ程の高濃度の放射能は検出されなかった。しかしながら、福島第一原発周辺の、檜葉町や、大熊町、飯館村の人々が集団避難先として会津若松に避難することになり、会津若松市は被災者受け入れ場所として震災に能動的に携わることになった。その一環として、会津若松市のハローワークでは、避難民の仕事先を手配するために被災者特別相談窓口を設置することになり、被災者の対応を迫られることとなったのである。

そこで、私はAから震災復興支援に携わった個人的体験なり経験を語ってもらい、日々の生活を生きている人の生活史を記録し、それを社会学の資料として残すことは、有益であると考えた。だから、ハローワークでの仕事の実態はどのようなものであったか、また、被災者支援として仕事に携わること、どのような意味付けがなされたのかについて、語ってもらおうと思ったのである。

研究目的

以上の意図から、本研究は、福島県会津若松市のハローワークで働くある女性Aのライフストーリーを記述し、被災者支援の実態を把握することを目的とする。それと同時に、ハローワークで実際に働いた体験を、どのようにAが解釈して意味づけを行い、Aの人生経験としていったのかを明らかにすることを目的とする。その際、相互行為によるライフストーリーの中で、自分をどのように位置づけ、アイデンティティを付与させていったの

かということも、明らかにすることを目指す。

研究対象

研究対象となる人物とは、著者の姉にあたる女性A（今後はAのみで記述）である。Aは千葉県松戸市出身の30歳の女性である。Aは結婚を期に、都内で働いていた正社員の仕事（マーケティング会社に在籍）を退職し、2011年の3月に夫が働いている会津若松市へ引っ越した。そして、引っ越した矢先に東日本大震災に遭遇した。震災後約一カ月経過した2011年4月から、福島県会津若松市のハローワークへ、契約期間が2013年の3月までの契約社員として就職が決まり、被災者特別支援業務に携わり、2012年10月に出産の事情によって退職した。現在は子育てのため、会津若松を離れて実家で生活をしている。

A氏1人に焦点を当てる理由は主に2つある。1つは、時間の関係上A氏のみしか十分なインタビューを行うことができなかったという事情がある。2つ目の理由は、できるだけライフストーリーの様相を詳細に描きたかったからである。

研究手法

本研究の手法について述べる。まず、ライフストーリー研究法の分類を行い、ライフストーリーが社会科学の研究においてどのように用いられているかを述べる。次に本研究ではどの研究方法を用いるかについて述べ、ライフストーリーを定義づけることにする。

一般的な意味におけるライフストーリーとは、ある個人が生活上で体験した出来事についての語りのことである。

ライフストーリー研究が社会科学の領域においてどのように用いられているのかという点は、桜井厚（2002）の考えるライフストーリー研究に対する分類が参考になる。よって本研究によるアプローチはどの視点から行われているのかということを、桜井厚による分類をまとめ、それに依拠した上で明らかにする。

桜井によれば、一般的にライフストーリー研究法には、大きく分けて二つのアプローチが存在する。ひとつは、実証主義アプローチと呼ばれるもので、ライフストーリーそのものが科学的であって客観的でなければならないという思想から影響を受けたものである。その見方では、ライフストーリーは時間的な経過をたどって展開し、客観的な事実や経験によって裏付けられなければならない。ライフストーリーは自然科学の実験のようになり、誰でも同じ手続きを踏めば、同じ結果が得られると考えるのである。つまり、推論の立て方は演繹的である。このアプローチにおける前提条件は、客観的な事実や、あらかじめ自我及び主体というものが存在していると考えている。そして、その相互因果関係によってライフストーリーが形成されるものと考ええる。

もう一つは、ナラティブ(物語)・アプローチと呼ばれるものである。このナラティブ・アプローチには、解釈的客観主義アプローチと呼ばれるものと、対話的構築主義アプローチの二つに分類される。

解釈的客観主義アプローチとは、インタビューを行った記録を結果として、帰納論的な推論を行うことを基本としながら、語りを研究者が解釈し、ライフストーリー・インタビューを重ねることによって社会的現実を明らかにしようとするものである。その目的は語り手の語りから意味を解釈し、語り手の意識されざる現実を記述することを目的としている。

対話的構築主義アプローチとは、ライフストーリーを過去の出来事や語り手の経験を表象していると考えのではなく、インタビューの場で、語り手とインタビュアーの両方の関心から構築された対話的な構築物であると考えられるアプローチのことである。体験を語るというのは、個人が生活上で体験した出来事を、発話及び言語形式を通して表現するということである。それはつまり、語られた言語を使用する社会の文化的慣習による制約を受けるということである。そのうえ、語りには現在の語り手の動機も作用する。語り手はインタビューの場で語りを構築する場所や状況によって、アイデンティティを変容させるのである。したがって、インタビューがライフストーリーを構築するのである。

桜井の、ライフストーリーの研究法を以上のようにまとめると、本研究はナラティブ・アプローチに該当する。なので、本研究ではライフストーリーを、語り手である女性Aとインタビュワーである著者の相互行為を通じて生まれた構築物であると定義することにしている。そのようにライフストーリーを考えた上で、構築されたライフストーリーを著者が解釈して、ハローワークでの仕事がどのようなものであったのかという実態を明らかにするとともに、Aがハローワークでの体験をどのように解釈し、意味づけを行ったのかを明らかにする。

データ収集方法

データの収集方法は、A氏に対して1回80分から120分のインタビューを2012年の11月末に二回実施した。インタビューに要した時間は総合すると約200分であった。インタビューを行った場所は、A氏の実家である。実家ならA氏にとって十分落ち着いた環境であり、尚且つ2人だけの会話ができる個室である方が、プライバシーを配慮することにのみならず、ライフストーリーを語りやすいのではないかと判断したからである。

インタビュー形式は、非構造化インタビューであり、はじめに、「Aさんが会津若松に引っ越した頃からの話を自由に語ってくれないか」と示した後は、できるだけ対象者の語りを損なわないように配慮した。それでも、話が途切れてしまう時には、Aさんの話の内容から気になったことをいくつか質問した。

一連の過去の体験や実態についての語りが終了した後、「あなたにとってハローワークで働いた一年半についてどう思っているのか」、「将来について、どのように生きていきたいのか」という質問をした。

面接内容はA氏の許可を得てICレコーダーに録音をし、研究者であり質問者でもある私自身の発話もそのまま書きおこした逐語録を作成した。その逐語録が、本研究の透明性を確保するものであると筆者は考えるので、プライバシーの侵害にあたる個人情報については編集するが、それ以外の内容は極力編集せずに載せることにする。

Aは私に対して姉にあたる関係になるので、十分面識はあり、始めて出会った人に対してインタビューを行うよりも、信頼関係は構築されていると一応筆者は考えている。尚且つ実家でインタビューを行ったので、充分親密な状態でインタビュー及び本研究を開始しているつもりではある。

倫理的配慮

研究対象者が自分自身の過去の出来事について語るということが、個人の内面を表明することになるため、話したくないことについては無理に話さなくてよいと述べた。また、得られたすべての情報は研究目的以外では一切使用をしないこと、個人情報の保護を守るということを約束した。Aのライフストーリーから作成した生活史については、その内容に間違いがないかAに確認してもらい、研究結果を論文として発表することについても同意を得た。

トランスクリプトの凡例

- ・語り手はA、聞き手(筆者)は*で表した。
- ・(：)は沈黙、(、)は約一秒を表す。
- ・○は文意をわかりやすくするために補ったもの。
- ・□は同時発話を表す。
- ・IIは、発話と発話の間に間隔がなく、しかも重複していない発話のことを表す。
- ・Iは、音の引き延ばしを表す。
- ・句点(。)は、文の切れ目を表し、読点(、)は、語句の談足を明らかにする息継ぎの箇所を示す。
- ・疑問符(?)は、語尾が疑問文で終わるとききの音調を示す。
- ・語り手や聞き手の笑いは、(笑)で表す。

本論 ライフストーリー

1. 復興支援に携わる

(1) 都会から地方へ越してきた生活者⁽¹⁾ Aとして語る

Aは2011年の4月に夫の住むアパートへ引っ越して、数日経ってから、このライフストーリーは始まる。Aには最初に自由に会津若松市に住んでいたころの話を自由に語ってほしいと伝えたのだが、自由に話すということに多少戸惑いを感じていた。なので、質問者からハローワークに就職したころの話から語ってほしいとお願いした。Aは様々な記憶を想起させて会津若松に就職した頃の状況から語り始める。

A：うーん。ちょうど震災の時に会津若松にきたじゃん？都会ではマーケティングの仕事とかさ、バリバリやってて、田舎ではそういう仕事ないとわかってたってたら、大きい企業だったし。(…)たまたま市役所行った帰りに、その近くに高校があって、そこが避難物資の届ける場所で、体育館の中に大量に物資が送られてきて、なんかボランティアの人が、その避難(…)物資の仕分けのボランティアの人がたくさんいたから、まあちょうど仕事辞めたばかりだし、実際前の会社の同僚にフクシマに行くって言ったたら、トイレットペーパーやら洗剤を預かってたんだ。それを届けてくれて言われてたんだ。

*：あーなるほどね。それは、ああ千葉じゃない。神奈川で働いている同僚から貰ったのか。

A：そうそうそう。それを届けに行ったときに、すごく殺伐としてるじゃん？そういう所って(…)だから、なんかちょっと人の役に立てる仕事をやりたいと思ったんだ。

*：あー。そうなんだ。なるほどね、それでじゃあたまたまハローワークの仕事があったんだ。そういうわけですかね？

A：そう。ハローワーク(…)

*：ハローワークの求人はどうやって探してきたの？

A：なんかね。別にハローワークの仕事がしなかったんじゃないかって、(…)暇だったんだよね。

*：あー。(…)

A：で。

□

*：時間的余裕があったというか、とりあえず暇だったのか。

□

A：そうそう。

*：なるほどね。で、あれ？4月に会津に行ったんだっけ？

A：そうそう。だからボランティアしながら（…）なんか、まあ簡単な事務系のパートでもやろうと思っ、ハローワークの求人情報を見てたら、たまたまそういう（…）

*：ハローワークの仕事があった？

A：あー違う。もともとキャリアアカウンセラーの仕事に興味があつて。ごめん話が前後して。

「」

*：いやいいんだけど。なるほどね。

A：それでね。ちょうど職業相談員の仕事があつて、かつそれが震災被災者支援の仕事だったのね。被災者の支援をしながら職業相談の仕事ができるのは、こんなベストマッチな仕事はないと思っ、

*：あーなるほどね。

A：そうそう。それで受けたら受かつた。

*：あーなるほど。じゃああれか。最初震災が起きたときは、ボランティア関係の仕事やろうみたいな？

A：ああ。そう。そうそれで、ボランティア関係の仕事も手伝えたらいいなと思っ、それをなんかメインで、ただ、それだけしかやらないっていうのは、なんか嫌だなと思っ、

*：なるほど。それプラス、もともとキャリアアカウンセラーになりたいっていう自分の希望が、

＝

A：そうそう。

*：なるほどね。

A：それがなんか二つ合致した仕事が偶然にも求人にあつて、

＝

*：あー。

A：それやってみるしかないかなと思っ、応募したんだ。

(2) ハローワークの従業員として語る

Aは時折言葉を詰まらせながらも、自己のライフストーリーを語っていく。ハローワークに就職したことを語ったところで、Aはハローワークに就業してからの体験談を語り始める。この語りからAはハローワークの従業員としてのアイデンティティを持ち、従業員の立場から語り始めている。語りの内容は、ハローワークで実際に携わった業務についてであり、業務内容を説明すると同時に、その業務に基づく体験を語った。そして、その体験から、Aが思ったことについて語るといふライフストーリーが展開されていく。

A ..なんかね。最初やった時は、本当に何をやってたらいいかというのがわからなくて、まあ会津地域に大熊町とか檜葉町とか、まあ浜通りの人たちが避難しているのはわかっているわけじゃん。(´) だから、その、まずは実体調査をして、どういう支援をしていくのかというところから仕事をやり始めたんだ。まず、ハローワークだから、いずれにしろ、まあ原発関連で職を失った人が大勢いるわけだから、まずは二時非難先っていうところに被災者がいるから。ホテルとかね。

* ..うん。

A ..東山温泉とかに行つて、まあ一応ね、あの、被災者の状況を調べるという意味でも、どれだけ人数がいるのかを一応把握するためにも、職業相談会をやつてね。

* ..なるほどね。

A ..そうそう。

* ..それは直接話を聞きに行つたの？それとも？

A ..ホテルのロビーとか宴会場とかの会場借りて、何でもいいから相談してくださいとか、チラシをホテルの各部屋に突っ込んで、来てもらうとか、ホテルのアナウンスを借りて、ハローワークが来てるから相談したい人は来てくださいとか。ふつうに職業相談だけじゃなくて、失業保険とかの手続きもあったから、そういう人にも来ていただきたいみたいな。

* ..ああなるほど。最初はそういうことをやつたのか。

A ..そうそう。

* ..なるほど。それは東山温泉の他にも芦ノ牧温泉とかにもいったの？

A ..あと猪苗代温泉かな？

* ..ああ猪苗代温泉の人たちもいたのか。

A ..そう。猪苗代温泉に避難してる大熊町民とか浪江町民の人たちに会いに行つた。

二

* ..あーそうだったのか。

A ..そういったところで支援に結び付けていかなければならないんだけど。まだ、いきなりね、職業というか、就職しようというような状況じゃないじゃん。まだ会社に在籍している人もいるから。

* ..うん。

A ..だから、まずどうするかっていうと、まあ実体調査プラスαで、避難者たちはメンタルヘルスのところが弱ってるんじゃないかっていう、予測をたてたんだ。まあ当時の上司が（考えるに、二時非難先の避難者は）ね、仕事をする気持ちまでに至らないわけじゃん。気持ちが沈んでるから。

* ..うんうん。

A ..だから、まずは心の回復を待とうというところで、被災者の人たちの話を聞こうというような支援を第一段階としてやろうとしたんだよ。

*..うんうん。なるほど。

A..そのために、臨床心理士とかを雇おうとしたけど、見つからなかったんだよね。だから、私たちがカウンセリング研修とかを受けて、まずは被災者の人たちの話を聞くみたいなの。

*..なるほど。その仕事は1カ月ぐらい続いたの？

A..しばらくメンタルヘルスの仕事をやってたよ。そうだね。1年ぐらいはやってたかな。

*..へえー。

A..まださあ。仕事紹介の仕事なんて落ち着いてないからできないじゃん？

*..あー。そうかあ。(..:) 最初にじゃあ4月中旬ぐらいに入社してから、メンタルヘルスを主な仕事にしたのか。

A..そうそうそう。4月から、4、5、6、1年ぐらいかなあ？

*..1年もやってたの？

A..まあ仕事っていうと、被災者の人たちを精神的に追い込んだりから、まずは話を聞くぐらいかな。

*..あーなるほどね。その、ああ、つらい思いをした心情を。

A..そうそうそう。で、ハローワークとしても、本当に職業支援じゃなくて、被災者支援事業ということで、町とかと連携しながら、本当に被災者にとって、生きていくことを考えていこうという、厚生労働省として。

*..あー。そうなのか。なるほどね。じゃあAさんはその、就職してからは、ちゃんとハローワークの一員として、復興支援を頑張ろうみたいな気持ちだったの？

A..うん。新しく自由をつくるっていうところに、やっぱ燃えるよね。

*..自由？あー。

II

A..事業事業。事業というか、なんかまったたく方策が立ってないところに、今回初めてじゃん？こんな未曾有の大震災が起こったのは。だから、どういう支援ができるのかっていうのを考えていくのかっていうのは、すごく意義があるというか、やりがいはあるよね。

*..あーなるほど。(..:) そうだね。

Aは、入社当時にはハローワークでの事業内容に興味を持ち、その事業内容に共感し、熱意を持って仕事に取り組みもうとする姿勢が見て取れることから、Aの仕事に対する社会的意味を意識していたように思われる。

(3) ハローワークの支援事業と被災者の望んでいることとのギャップを語る

Aは就業当時は、ハローワークの事業にやりがいを感じ、ハローワークという仕事から

復興支援に携わることの意義を感じていた。だが、具体的な業務を行うにつれて、被災者支援事業に疑問を持ち始めていく。どうやら、その原因をAの語りから考えるに、業務の内容と被災者の利害関係が一致しないのではという疑問を感じていたようである。

A：でも思った。ギャップがあってね、来ないんだよね、ハローワークに。出張相談会とかやるんだけど、なかなかハローワークっていう看板を出してやっちゃうと、被災者の人たちが来ないんだよね。あんまり相談しに。

*：あー。そうなんだ。

A：こっちが来て、支援します支援しますというふうなスタンスを見せても、被災者としては、まだ気持ちが進まないから、こう、来ないっていうか、ハローワークの思っていることと、被災者の人たちの思っていることが違うんだ。こっちはメンタルヘルスというか、あなたたちの話を聞きます読みたいな姿勢を見せてても、なんでハローワークさんなんか相談しないといけないんだよって。

*：あー。なるほどね。それはあれなの？被災者の人たちの気持ちを整理できてないみたいな感じなの？

A：そうだね。気持ちをぶつけるところが、ベクトルの方向が東京電力の方に向いてたりとかで、ハローワークに対して心を開かないというか、関心がないみたいな。

*：あー。なるほどね。じゃあ、国に対する怒りとか、東京電力なんとかしてくれとか？

A：そう。そうそう。
*：あー。そういう人が多くて、ハローワークの話を聞いてくれる人が少なかったわけだ。

＝
A：まあ聞いてくれるっていうか、こっちが聞くっていうふうな形だけど。

*：ああそうか。ハローワークに来てくれる人がいなかったわけだ。

A：そうそうそう。

*：なるほどね。

A：気軽に来てもらえるように、なんだろう。リラクゼーションの会とか、なんだろう、（ハローワークの業務内容は）職業相談だけじゃないんですよみたいな広告を作って、配布してたんだけど、こなかったね。

(4) 避難民の仮設住宅入居後の業務

Aは業務に対する想像と現実とのギャップを語った後に、避難民が仮設住宅へ引っ越してからの仕事内容について語り始める。2011年の5月から仮設住宅が建設され、大熊町民を中心に6月から順次入居が始まる。その影響から、Aを含め、ハローワークの震災被災者支援を担当している従業員は仮設住宅の集会場を借りて出張相談を行うようになった。

出張相談に関する業務は、まず、午前の9時から12まで仮設上の集会場で出張相談を行うと告知をしてから、仮設住宅へ向かい、相談者が集会場へ相談しに来るのを待つという業務であった。出張相談は各仮設住宅に月に二回は廻るように予定をたて、広報誌をつくり、ハローワーク9月の出張相談会お知らせとして告知を行っていた。

毎日ローテーションで各仮設住宅（会津若松市内には2012年現在では13の仮設住宅が存在する）の集会場へ行き、午前中は相談者と話をする。午後からは、相談者の報告書を作成したり、広報誌の作成や、被災者の実態調査を行うことが定常業務であったとAは述べている。

仮設住宅へ引っ越してから、Aは職業相談に来る人が増えるのではないかと考えていたが、一回の出張相談につき、0〜2人しか相談に来る人はいなかったと語っている。以前被災地で働いていた会社で、賃金未払いなどの問題を抱えている人もいるのではないかと予測から、労働基準監督所と合同で出張相談へ行くこともあったが、労働基準監督所の相談件数は0件であったと語った。

被災者は東京電力の補償に関心を抱いており、職業支援は時期が早かったのではないかと、Aは感じるようになるが、仕事の意義はメンタルヘルスにあると感じていたので、仕事は頑張れたという。しかしながら、大熊町の役員関係者が、職業支援事業に否定的であったということに、ショックを受けたと感じたという。

A：今度ホテルに住んでる人たちは、7月8月あたりから、仮設住宅に引っ越しを始めていったのね。ホテルには誰もいなくなっちゃったから、今度は仮設住宅の集会所を借りて、行ってたかな。もう毎日なんかしらの仮設住宅に通ってたかな。

*：それは職業相談しにまわってたの？

A：そう。

*：それは具体的には、どういう仕事に就きたいですかとかを聞いたりしたわけ？

A：そうだね。そうだね。だけど、どんなことでもいいから話に来てくれっていう思いで待ってたんだけど、なかなか人が来ない。

*：なるほどね。アナウンスとかしても？

A：全然来ない。東電の補償の説明会とかをやるとすごいたくさん人が集まるのに、やっぱり、その

二

*：職業支援になると

A：..うん。その理由もあって、東電から補償金をもらってたのね。なんだろう。その就業できなかった人は、東電も補償するっていうから、働かなくても前働いていた分の給料をもらえるのね。で、会津って給料がすごく安いんだよね。例えば、大熊町やいわきで原発関連の仕事をした人なんかはたくさん給料もらってたんだけど、会津では給料が安いから、敢えて働かないで、前働いていた仕事の給与補償をもらうた

めに、東電から。敢えて働かないっていう人が多くて。そういう理由から、ハローワークに相談に来る人もいないっていうね。(2)

*..なるほどね。

A..やっぱり職業相談会をやるって、時期が早かったのかなって。

*..ああー。なるほどね。避難してる人たちに対してなんか言いたいこととかあった？

A..そんなん働いている状況じゃないだろうなと思ってたから、むしろハローワークが：なんて言ったらいいのかな。こっちがやりたいことと、被災者の思惑がずれてるから、難しいなあって思った。

*..そっかそっか。同僚はなんか言ってた？

A..上司は待ちましようって。しょうがないって。ただ、仮設住宅の出張相談行っても、相談者が誰も来ないっていう日も結構多かったのね。それでも、ハローワークが看板だしていつでも相談できますよっていう環境が大切だから、続けましようっていう感じで、人数が0だからやめましようっていうのではなくて、まあ、そういう意志があったから続けてただけ。ただ、大熊町の役場の人とかが、職業相談しに来る人が少ないから、出張相談するのは辞めませんか？どうせ働く気ないんですよみたいなことを役場の人が言ってるのはどうなのかなって思った。大熊町の役場の人たちが、町民に対してね。

*..なるほどね。(..)そっか。まあ大熊町の人たちは(就業相談しに来ない理由として)、早く帰れるだろうというか、会津若松に長期間も留まるなんて思ってたなかったのかね？

A..若い人はもう帰れないっていうのはわかってたね。やっぱりね、当時原発関連で働いている人が多いから、誰よりも現場のことは知ってますみたいな人は多くて、事故の映像を見た人は、もう駄目だなって。悟ってる人が多くて、帰れると思ってる人はじいさんやばあさんぐらいだったかな。墓があるからとか。

*..なるほどね。そういう若い人たちは、帰れないことはわかってるわけじゃん？だから、会津で働こうって思わなかったのかな？

A..若い人たちもほら、補償金もらってるから。

*..あー。なるほどね。

A..うん。要は補償金なんだよ。

*..補償金か。金か。

A..東電が払いませんっていったら、職探しするかもしれないけど。

(5) 特別相談窓口の開設と失業保険給付手続き

2011年の7月から開始した仮設住宅の出張相談は、思うように成果を出すことができなかったとAは語った。10月に仮設住宅に住む避難民の実態調査を行ったところ、高

齡者が多数住んでいるということがわかり、就労できるような世代の割合が低いということが判明したという。そこで、民間借り上げ住宅に住んでいる人について調査したところ、会津若松市内には多数の人が住んでいることが判明したとAは語った。

仮設住宅に住む人と借り上げ住宅に住む人の区別は、もともと、一時避難先として温泉旅館に避難し、生活していた人たちが、二次避難先として、仮設住宅へ避難する人と、自分たちでアパートを見つけて避難する、借り上げ住宅に避難する人にわかれたことがきっかけである。

2011年の10月までは、ハローワーク会津若松の特別支援業務は、仮設住宅に住む被災者を対象に支援事業を行ってきた。だが仮設住宅のみの就労支援だけでは需要は少ないと判断し、仮設住宅と比べて働き盛りの人が多数住んでいると思われる、借り上げ住宅に住む人が利用できる窓口がないと、事業目的を果たすことはできないと考えた。

そこで、2011年11月からは、ハローワーク会津若松の小道を挟んで向かい側に、事務所を借りて、借り上げ住宅に住んでいる人にも相談ができる、震災特別相談窓口を開設した。この窓口は被災者専門の事務所で、相談者が事務所へ来たら対応をするという業務内容であった。事務所の営業時間は午前9時から17時までで、ハローワーク会津若松の、他の相談窓口と同じ時間であった。特別相談窓口には、Aを含め4人の従業員が働いていたので、4人のうちの2人は、午前中は変わらず仮設住宅の出張相談へ行き、残った2人は事務所内で、借り上げ住宅の被災者から相談が来るのを待つという業務に変化したとAは語っている。

Aを含め、従業員の思惑としては、相談しに来る人は増えるのではないかと期待したが、思うようにはいかなかったという。Aはそのような状況に、退屈さを感じていた。このままでは2012年度の予算が取れないと危惧し、2012年の2月から次のような行動に出たという。

*..特別窓口を開設してからも結構暇だったんだ。

A..暇だよ暇。超おしゃべりばかりしてたもん。

*..ああそうだったのか。笑

A..仲のいい被災者の人は、なんかおやつとかもってきたりとか、渋茶もってきたりとか。オフレコだけどさ。暇だったよ。めちやくちや。昼寝しちゃうってる人もいたしね。

*..いやいやいや。笑 オフレコじゃなくていいと思うよ。

A..超暇だよ。だって。

*..そうなのか。笑

A..暇だからおしゃべりしたり、だって（相談者が）来ないんだもん。

*..じゃあもうおしゃべりが多かった？

A..そうだね。暇だからね。

*..そうか。社員の人たちと話してたの？

A：そうそうそう。被災者でも、なんか一方的にしやべる人もいるから、そういう人がいるときは、ずっと話を聞いてたりしてたけど、基本的には人がいないから、社員としやべってた。

*：そうなんだ。それは、普通の雑談？

A：そうそう。(；；) 結局さ、ハローワークっていうのは、相談者がいないと、来年の予算が取れないんだよね。で、そこで、上司が考えたのが、2012年の2月から、失業保険をもらっている人たちの給付が切れるのね。今回で、今まで

＝

*：失業保険の期限がね。

A：そうそうそう。で、何を考えたのか、その給付の期限が切れる人たちすべてに対して、相談をいまして。今までは相談しに来る人に対して、来たら相談するっていうやり方だったけど、給付切れる人に対しては、必ず相談しなければならなくてっていう、ノルマをつけたんだ。そしたら一気に相談者数が増えて、当然ね、無理やり

＝

*：まあこっちから行くわけだからね。

A：そうそう。それが相談者数っていう形になって、一気に数が伸びたんだよね。

*：あー。そうか。失業保険の給付が切れるのは、震災が起きてからどれぐらいだ？何年？1年ぐらいもらえたのかな？

A：なんかそれは、貰える給付日数っていうのは、働いてた期間とか、雇用保険に加入してた期間とか、年齢とか、そういうので変わったりするから、一概には言えないけどね。

*：それは、まあ平均的に失業保険の切れる＝

A：＝切れるのは、2月から9月ぐらいだったら、切れてくるのがわかってたから被災者の人たちが。今度さすがに給付が切れたら、働かなくちゃならないっていう人もいるかもしれないっていうことで、そういう人を捕まえて、相談にしようっていうね。

*：なるほどなるほど。そこで話をしてた時に、会津で働きたいと思ってる人たちはいなかったの？

A：いないこともなかったよ。パートをやりたいとか。で、そういう人たちに対しては、2週間に1回ぐらいのペースで、求人表を送るっていうことになってたのね。

*：うん。(；；)

A：なんか例えば、会津でバスの運転手とかやってみようかなとか。

*：うん。

A：実際その求人票を送って、応募して、採用になった人もいたけど、ほとんどの人は何のリアクションもなし。やっぱり求人票を見ても、賃金安いとか、場所が遠いとかで、食いつく人はいなかった。

*..なるほどね。じゃあ正直な話、ハローワークから仕事の紹介をしますっていうことをやってきたけど、正直な話、成果はあがらなかったというか、いまいちな感じだったの？

A..全然いまいちな感じだよ。

*..なるほど。けどそれは2012年だよ？

A..2012年の2月だね。

*..2月から9月くらいか。そっかそっか。(..)

(6) 職業相談

ここで、質問者が職業相談に来る人はどんなことを相談するのかということを質問したところ、Aが体験した職業相談の業務を語ってくれた。職業相談は1日0〜2件ほどだが、1人に対して相談は2時間に及ぶほどもあったという。職業相談の方法は、まずメンタルヘルスを目的とするカウンセリング中心の相談をする。相談者に心情を吐露してもらい、抱え込んだ思いを吐き出してもらうために、震災当日の話や、会津に来て今どんな心境であるのかということを探るのだという。すると相談者は、当時の生々しい体験を話し始めるのだという。心情を吐露してもらい、相談者の気持ちたちが落ち着いてから、職業相談に移るのだとAは語った。Aは職業相談の体験を話した後に、体験から得た個人的見解を述べる。

*..大熊町にいたときは、どういう仕事をしてましたかっていう話はするわけでしょ？

A..聞くよ。もちろん。

*..大熊町でどんな仕事してる人たちが相談しに来たの？

A..結構原発関連の仕事をしてる人とか、プラスチック工場で働いてた人とか、工場労働者とか、あとは、普通にスーパーの店員とか。自営業はあんまり来なかった。

*..あー。そうなんだ。

A..大熊町にある工場で働いてた人とかが多かったかな。

*..なるほどなるほど。別に漁師とか農家とか、自営業の人たちは来てなかった？

A..工場労働者の人たちがメインだったかな？農家の人は兼業農家だから、農家プラスチック工場勤務みたいな人はいたかな。

*..なるほどね。主に相談しに来た人っていうのは、工場労働者の人が大半だったわけでしょ？その被災地で仕事を失って、やばいなみたいな。

A..うんうん。そうだね。

*..そういう人たちってさ、もとに戻れたとしても、工場が稼働してなければ職がないわけでしょ？

A..そうそうそう。

*..じゃあそれは結構不安はあるよね。

A ..しかも結構いい給料もらってたからさ。(3)

* ..なるほどね。それで、不安になつてくるわけだ。

A ..そう。

* ..けど、そう人たちこそ、仕事を紹介しやすいんじゃないの？

A ..いや、賃金が低すぎて、引いちゃうんだよね。こんなに安いみたいなのだったらしいやみたいなの。この賃金で働くぐらいなら、敢えて働きませんっていうね。

* ..そうなの？そんなに賃金が違うの？

A ..うん。

* ..そうなんだ。え？それだつて別に平均賃金が違うっていうことじゃないでしょ？

A ..いや平均賃金が違うんだよ。地域格差だよ。東京と地方はぜんぜん給料違うみたいな感じだよ。

* ..けど会津と大熊町って、そんなに違うものなの？

A ..全然違うんだよ、実はね。よくこんな安くて食っていけるねって、大熊町の人たちは引いてる感じかな。

* ..あーそうなんだ。つてことは、別に働こうと思えば働けるんだけど、まあ、若者の感覚で言うところのブラック企業みたいな、そういう感じかな？

A ..リそうそうそう。だったら、これに費やすのきつくない？みたいなの。

* ..働くぐらいなら遊んでるよみたいなの？

A ..そうそう。よっぽど暇でしょうがないっていう人ぐらいしか、働こうとは思わないんじゃない？あとやっぱり、危機感のある人だろうね。働かないとまずいと思つている人たち。

* ..不安感を感じる人か。あー。(.)けど、2011年の時は、出張相談所で待つてたわけでしょ？

A ..うん。

* ..で、1日1人か2人来るわけじゃん？

A ..そうそうそう。

* ..そういう1人か2人来てた人たちっていうのは、工場で働いている人とか、パートのおばちゃんとかだったわけだ。

A ..そうそうそう。おばちゃんおばちゃん。

* ..その旦那さんは来ないの？

A ..旦那さんね。そう思うでしょ？旦那さんはね、話を聞くと、単身赴任してる人が多いんだよね。会津って。旦那さんいわきで就職したりとか、

二

* ..あー。避難せずに？

A ..そうそう。原発関連で、まず復旧作業みたいなのを、ずっと作業員として働いてるみたいなの。

*..あー。なるほどね。それはじゃあ原発関連の仕事をしてる人か。

A..そうそうそう。原発関連の仕事をしてる人が多いから、まだ旦那さんはそっちで働いてますって言う人が多い。

*..そうか。そういうことね。子供たちは、会津には来てるわけでしょ？

A..そうだね。やっぱり親子でいわきに住んでも、放射線が怖いっていう、心配する親いるじゃん？

*..うん。

A..だから、子どもと妻だけは会津にいますみたいな。

*..ああそうなんだ。じゃあ妻は大変だね。子供の世話もやらないといけないし、パートも探してるわけでしょ？

A..そうそうそう。だから、働けないって言う人も多い。いままでさ、大熊町に住んでた時は、おじいさんおばあさんと、普通の夫婦世帯とかで、こう、ああいう田舎って、なんかそういう世帯で住んでる人が多くて、子供はおばあちゃんに面倒してもらいましたみたいな。それが震災でバラバラにさ、みんな住むようになって、預ける人がいないから、働けない人もいた。

*..なるほどね。けどそのじゃあ仕事を探してた人たちは、けっこう子供がある程度自立してる人が多かったわけ？

A..そうだね。働きたいと言ってる人は、子供が高校生とか、60歳過ぎのおばちゃんとか。

*..60過ぎのおばさんか。それは別に、パートで軽く賃金を、収入を得たいっていう人たちなのかな？

A..そうそうそう。なんか、年金をもらいたいから、そういう人たちって。あと、大熊町にいたときには、あと何年働いてれば、年金が、例えば65歳から年金支給されるためには、何年間年金を払わなければならないみたいなのルールがあって、それを満たすために働きたいって言う人もいたかな。

*..あー。なるほど。

A..いま仕事なくなっちゃうと、65歳から貰える年金がもらえなくなっちゃうみたいな。

*..なるほどね。リアルな生活事情があるわけだ。そういう相談をされるわけだもんですね。

A..そうそうそう。

*..そうやって相談しに来る人たちの話をきいて、希望にあった仕事を紹介するわけだ。

A..紹介するよ。パートでとか。

*..そうなんだ。

A..あとね、結構雪が降るからね。なんかね、結構ね、怖くて冬場は運転したくない

から、ちよつと働けないって言う人もいる。

*..あーなるほどね。(；)

A..やっぱり被災者の人たちと話していると、会津に住みたいって言う人はあんまりいないのね。浜通りに戻りたいって言って、やっぱり故郷に戻りたいって。やっぱり気が全然違うんだよ。そういうえば浜通りの方に飯の街を創るっていう話があったから、どれぐらい話が進捗してるのかな。大熊町には戻れないのはわかっているから。

*..そうかそうか。

A..せめていわきに行きたいって言う人は結構いる。やっぱり浜通りでいつか働きたいとか。たださ、私が被災者に対して思うことは、私さ、いくら住む場所もないから働けないっていう人の気持ちもわかるけどさ、やっぱり離職してる期間が長いとき、なかなか次働くっていう時に、意欲がわかなかつたりとかさ、ほんとにこういう状況が続いているっていうのは、よくないんじゃないかって思うことはある。

*..うんうん。つまり、ずっと補償がもらえるわけでもないのに、ほんとに働かなくていいのかなっていうことね。

A..そうそう。

*..その何もしない人たちに対して、このままじゃまずいんじゃないかっていう。

A..そうそうそう。

*..なるほどね。

A..ちよつとトイレ行ってくる。

Aは就業意欲の低い相談者に対して、このままではまずいのではないか、就労意欲がなくなってしまうえば、生きることが困難になってしまうのではないかとという感情を抱いていた。しかしながら、2011年度はハローワーク会津若松の意図とは裏腹に、期待していたほど仕事の成果があらがらず、暇な時間帯が多かったので、Aは、仕事は退屈だったと語った。暇で退屈だと感じている状態は2012年10月末に退職するまで変わらなかったという。

ところがAが話を中断して、トイレ休憩を行ってから、話は急展開する。Aはハローワークの従業員として働いていた体験を忠実に語ることから、一変してハローワークの業務に対する不満を語り始めたのである。だが、不満を語り始めたところで、Aは語ること辞め、第1回のインタビューを終えることになった。

2. 特別相談の業務内容の正当性を疑う

2回目のインタビューでは、Aがなぜハローワークの就労支援業務に対する意欲がなく

なっていたのか、1回目のインタビューで語った体験をもとに語り始める。Aの仕事に対するモチベーションが低下した第1の原因として、実地調査をしないハローワークの業務内容に対する不満が挙げられる。1回目のインタビューで語られたように、Aは就業して間もないころから、実地調査をしない、被災者の視点を取り入れずに就労支援の啓毛核を立てると言うことに疑問を感じていたようであった。この疑問が、不満に変わり、2回目のインタビューでは、不満を述べることになる。

第2の要因として、福島県が設置した就労支援施設と、厚生労働省の設置するハローワークの就労支援事業が統括されておらず、別々に独自の活動を行っていたため、その正当性に大きな不満を持ったということによる。国と県の就労支援事業が統括されず、バラバラに活動しているという事実の背景にある内部事情にAは不満を感じていた。

(1) 実地調査をしないハローワークの業務に対する不満

Aは2回目のインタビューで、ハローワークの業務に対する意欲が減退していく理由を語り始める。それは、被災者の要望とハローワークの支援内容が合わなかったこと、その理由として、実地調査をしなかったことを理由に挙げて語った。

A：ハローワークはさ、マーケティングというか、調査しないんだよ。本当に被災者の人が何を求めているのかというのは知らないで、こっちでさ、きつと心が弱ってるからさ、メンタルヘルスをしようとかさ、こっちの想像だけでやってるから、それが嫌で、アンケートしましょうよとかさ、上司に行っただけど、そこまでするのはみたいな、却下されたりして、もうちょっとさ、ニーズを把握して、ポイントを、その、被災者たちが本当に求めていることをやった方がいいと思っただけで、
*：なるほどね。それもじゃあ全部、ハローワークが実地調査とかをして、どういうことをしてもらいたいとかいう、

二

A：そうそうそう。
*：そういう要望を取り入れるようなことをしてこなかった。
A：まったくこっちの思い込みでさ、自己満足のためにやってるみたいな。
*：なるほどね、そういうことか。
A：私はもうちょっと大熊町の役場とかと協力して、どういうニーズがあるのかということを細かく調査したほうがいいんじゃないかとは、常々言ってたんだけど。
*：うんうん。それは受け入れられなかったの？そういう話は？
A：そう。大熊町の人も、そこまではできませんみたいな。
*：なるほどね。

A：そこまでやるのはちょっとみたいな。うちの上司が。なんかね、ハローワークの上司の考え方が、なんか、なにかをしてほしいと思ったら、ハローワークから提案す

るんじゃないくて、町からお願いするべきだみたいな。

*..あー。なるほどね。

A..ハローワークって、国の機関じゃん？

＝

*..うん。

A..町は、町の機関じゃん？町っていうか、国の下にある機関じゃん？

*..うん。わかるよ。

A..だから、そういうね、上下関係を気にしてて、下からお願いしてこないとやらない
みたいなことがうちの上司が言ってるの。馬鹿じゃねって。

*..ああ。なるほど。ハローワークは、下請企業というか、国から言われた仕事をやれ
ばいいんだというか、別にハローワークから働きかける必要はないみたいなさうい
う感じ？

A..こっちでもやってあげようっていうような思いはあるんだけど、なんかそういうの
は下から言ってこないとメンツが立たないみたいな。

*..えー。

A..役場からお願いしないとねみたいな。なんで、こっちからわざわざこっちから行っ
てあげるんだ。お願いするんなら、いくらでもありますみたいな。

*..あー。なるほどね。ということは、町の人たちと連携が取れてなかったっていうこ
とね。

A..そうそう。しかも超くだらなくね？なんか、その変なわけわかんないさ、なんてい
うのかな？国が一番上だから、こういうのは、町から言ってこないと駄目だみたい
なさ。

*..そういう上下関係みたいなの？

A..そうそうそう。

*..なるほどね。そっか。

A..いやいやいや、そんなこと言っていられなくねって。

*..あー。

A..私、メーリングリストとかは作りたいて言っただもん。大熊町とハローワークとか、
県の機関とかを交えた（メーリングリストを）、で、いろいろそうだったグループを
つくって、例えば、被災者支援とか、そこで、情報共有とかしようぜって提案した
けど、それも却下みたいなの。

*..ああそうなんだ。

A..えっなにそのメーリングリストとかって、なんですすかみたいなの。

*..なるほどね。ああ。そうだったのか。そういうことはさ、もう常々話してたこと
なの？

A..してたしてた。上司にね、相談して、もっと情報共有をした方がいいから、メーリ

ングリストとか作ったりして、どんどん情報共有しましよって言ったんだけど、なんかやっぱり、自分の機関は機関で、やっぱまとまっちゃうんだよね。

*..なるほど。そうなのか。それもあれなの？早い時期に言ってたの？2011年

二

A..あつもう言ってたよ。11年からずっと言ってたよ。凄い熱心に言ってたんだけど、なんかこう、受け入れられなかったから、そういうのでやる気なくしたっていうか、

二

*..あー。

A..馬鹿じゃんみたいな。

*..なるほどね。(；)けど上司の人たちも何とかしたいとかは思ってるわけでしょ？

A..思ってるんだけど、なんか、段取りがちゃんとしてないとやだみたいな。

*..あー。

A..まず国から、そして県から、そして町からみたいだね。

*..そうなのか。なるほどね。

A..そうそう。(；)

*..そっか。役場の人たちとはさ、どういう話をしてたの？

A..ああ、まずやっぱり大熊町から避難してきた人数がわからないから、協力してほしいみたいなことは言ったんだけど、いやもう、どうせやる気ないからいいっすよみたいな。

*..あー。なるほどね。

A..自分たちの町民のことだから、もうちょっとさ、一生懸命考えてるのかと思ったんだけどさ。もう駄目っしょみたいな。

(2) ふくしま就職応援センター

Aは実地調査を行わなかったハローワークの業務内容のほかにも、労働に対する意欲が減退していった理由を語った。Aは、会津市内には厚生労働省から委託されたハローワークという就労支援窓口の他に、県から委託されたふくしま就職応援センター⁽³⁾という職業相談窓口が存在した。両事業ともに被災者に対して就労支援を行うという事業内容であったため、互いに類似していた。福島就職応援センターの従業員から、互いに協力して事業を行っていくとの提案がなされた。だが、事業目的がお互いに異なっていたことや、さらに内部的な事情、非合理的な理由が存在したことを理由に挙げて、合同事業が行われなかったことに対して、不満を語った。Aとしては、被災者の視点から考えるということをお怠っているということが、実地調査をしないという理由と併せて、不満に思っていたことだという。

A..県（ふくしま就職応援センター）はね、県の予算で同じ職業支援をしてる。こっち

は国の予算でやって、むこうは県の予算で同じ職業支援をやって、同じようなこう、職業相談っていうのを、窓口、看板だけ変えてやってるんだ。

*..あー。その県のさ、相談窓口っていうのは、どこにあったの？会津若松の。

A..あーどこだったかな。パソナっていう民間の、

二

*..うんうん。あのーパソナは派遣会社でしょ？

A..あそこに委託してやってたんだよ。パソナの人たちが、まあその、県の就労支援って言うのを請負でやってたからさ。

*..ああそうなんだ。人材派遣会社が。

A..そうそうそう。でなんかね、（ハローワークとは）やり方が違って、パソナの人たちもハローワークみたい月に数回、仮設住宅の集会所に出張相談をやってただけど、あの人たちは、一戸ずつ戸別訪問をしたのね。どうですかみたいなの？

*..なるほどね。

A..ハローワークは、それはやらないっていうスタンスだったんだけど、むこうはそういうやり方をしてたから、そういう風に一軒一軒回ると、また、〇〇さん来たみたいな感じになるから、もしかしたら、向うのほうが（職業支援センターの存在を）知られてたかもね。

*..そうなんだ。そのさ、お互いに顔合わせをした場面とかはなかったの？

A..あるある。向うの、パソナの人って言うか、県から委託されてくる人たちは、やっぱりその、被災者の人混乱するのね。

*..うんうん。

A..何このハローワークと県の相談って、なんか違うのみたいな。

*..なるほどね。やってるサービスがね。

A..で、他のハローワーク、会津以外の、いわきとか郡山とかは、混乱するのはよくないから、合同でやってるのね。

*..ああ。なるほどね。

A..県も国も一緒になってね。

二

*..一緒になってね。

A..だから、一緒にやりましょうよって、そっちのパソナの人たちも行って来たんだけど、これも私の上司が、いやー県なんかと一緒にやりたくないって。

*..あつそうなの？えっそれさ、やりませんかっっていう話はきたの？

A..きたきた。何回も来たよ。（声を荒げる）月に一回はいつも来る。

*..あつそうなの？

A..いい加減一緒にやろうって。大熊町の役場の人とかも、同じこと（就労支援）を二つの機関にやられても、混乱するから、一緒に合同でやってくれって町からお願

いされてるのに、うちの上司が、パソナなんかとやりたくないみたいなの、個人的な感情で、県も馬鹿だからやりたくないとか言い出して、

*..うん。それだって、他の社員さんたちはもう一緒にやった方がいいんじゃないかと思ってるわけでしょ？

A..リそうだよ。他のハローワークの社員の人も言ってるよ。

*..ああそうなの？上司が独断的に決めちゃったわけ？

A..そうそう。その担当の私の上司が、絶対やだって、個人的感情で。

*..ああそうなんだ。

A..だから、振り回されたかな。通常一つでやるところを、二つで。

*..ああそうなんだ。それってすごく混乱するでしょ？

A..混乱するよ。

*..ね。あつそうなんだ。しかも同じことやってるわけでしょ？

A..そう。

*..そうなんだ。

A..戸別訪問するっていうやり方とかも気に入らなかったみたいで、うちの上司が。

*..なるほどね。やり方が気に入らなかつたんだ。||

A..||押し売りみたいで嫌だって。

*..ああ。なるほどね。そのじゃあ今までこととまったく違うことをやるわけでしょ？自分たちから相談をしますっていうやり方は。

A..カウンセリングのなんか基本には、来談者中心っていう考えがあつて、自分からアプローチするんじゃないかって、来た人をこう受け入れますみたいな。

||

*..あー。受け身的だね。

A..それを、なんか覆すやり方だから気に入らないみたいなの。

*..なるほど、じゃあ自分の学んできたことか

||

A..そうそうそうそうそう。

*..正しいっていうか、それが正しいと思ってるから、積極的に出向くっていうのは、絶対にやりたくないっていうか、間違ってるいう風に思ってたわけだ。

*..そうそうそう。ロジャースっていう有名なカウンセラーがいるんだけど、ロジャースの考える来談者中心療法では、えっと、来た人を受け入れるスタンスだから、なんかそういうのは、(ロジャースの来談者中心療法にそぐわないから)だめだみたいな。ある思想みたいなものに基づいて、それに反してるからだめだみたいな。哲学と合わないみたいなの。

*..なるほどね。それじゃあ、現実のニーズとかは、一切考えたりしなかつたわけだ。

A..まあそうだね。ロジャースのやり方に則ってやりたいみたいなの。

*..なるほどね。あー。(；) それじゃあ、混乱というかさ、支援を支える側も、そういうさ、分裂して行動してたっていう。

A..まあね。なんかパソナって、民間に委託してるから県も、件数をあげたいのね。何件何件って相談件数を。

*..うん。

A..だからそういうパソナの人は、自分たちの相談件数を挙げたいから、一軒一軒無理やり扉を叩いてるっていうイメージがあって、実際にハローワークの郡山の方では、戸別訪問をしまくったせいで、住民から苦情がでたりとかあったのね。居留守使われたりとか。

*..そうなのね。そうなんだ。

A..だから、そういう件数をなんか、無理やり挙げるような、なんか、やり方は嫌だつて。

*..あつそうなんだ。そのさ、例えばさ、両方相談しましたみたいな人はいなかったの？

A..いるよ。いる。

*..いたんだ。そういう人は、どういう話してたの？あんまりそういうことは言っつてこなかった？その。なんだろ。

A..どっちなんですかみたいなのは言われたことはある。でもやっぱり、パソナとかはさ、ハローワークはさ、そのさ、営利目的で活動してるわけじゃないから、いつまでも、別に就職件数をすぐあげなくちゃいけないっていうノルマはないんだけど、パソナは民間企業だから、どうしても相談件数あげたりとか、就職件数をあげなきゃいけないっていう意識があるから、かなり一生懸命だったよね。こういう求人がありますみたいなの。

*..それはあれなの。県から委託されて、営業してるわけでしょ？

A..そうそう。

*..たとえば、そのパソナの人们が、営業成績というかそういう相談件数を挙げれば、そのパソナで働いてる人们的の給料が上がるとか、そういうシステムにはなってるの？

A..また来年でパソナで委託してもらえとか、そういう可能性がある。〃

*..なるほどね。そうかそうか。じゃあ一応、パソナは県から委託されてお金をもらってるわけだ。だから、頑張るわけだ。要するに動機が違うわけだ。

A..そうそうそう。で、ハローワークの考えは、まず就職をさせようっていうのじゃないか、まずは、その人たちの話をよく聞こうって、やっぱり人によっては、本当に就職したいのかっていうのが、わからない人がいるのね。たとえば、まだ前の会社に仕事を探しに来たんですって言っても、実はまだ前の会社に在籍してて、本当にどう辞めようか迷っている人たちもいて、そういう人にいきなり求人票をどうですかどうですかって見せるのは、ちょっと違うよねって。

*..あー。なるほどね。

A..本当はその人たちが何を悩んでるのかって。

*..なるほどね。なるほどなるほど。だから、あっそっか。ハローワークとしてはもともと、心情をまず聞きましようというスタンスなんだけど、県から委託を受けた方は、就職させるのが目的なんだ。

A..うんうん。こっちは別に就職させるのが別に目的じゃなくて、その人にとって何がベストなのかを、こう一緒に探していきましようって言うのを、カウンセリングを通じてやりましようって。

*..なるほどね。

A..パソナの人って言うのは、もういきなりこんなありますって、その人の話を聞く前に求人票を見せちゃうみたいなの。

*..なるほど。けど、そういうやり方を上司は知ってたから嫌だったの。

A..そうそう。知ってたからいやだったの。そういうのもあって嫌だったみたい。

*..それで、あちらのやり方も変えるならいいとか、そういう話にはならなかったの？
例えば、一回話し合って

二

A..ああそうそう。話し合ったよ。そういうやり方は嫌だっていう風に言って、パソナも、じゃあそういうやり方はしないって言ったんだけど、ハローワークさんの本当にじゃあくつついていて我々は、何かあったらサポートする程度でいいみたいな履歴書の書き方教えるとか、そんなんでもいいですよって、そこまで食い下がったのに、それでもやっぱり、パソナが気に入らないって。

*..ああそうなの？

A..もう毛嫌いしてるところがあったからね。

*..ああそうなの？民間企業だから毛嫌いしてるの？それとも福島県が嫌い

二

A..どっちもかな。県も嫌いだし、民間も嫌いだし。

*..そういう内部事情のいざこざがたくさんあって、

二

A..うんうん。

*..あーなるほどね。もうじゃあ、早い段階でもうなんかちよっと

二

A..そうそうそう。

*..どうしようもないっていうか、やる気がそがれる要因にはなったのか。||

A..||私が一番思うのは、やっぱ被災者の人たちにとって何が一番よいかかっていう。こっちの事情じゃん。県とやりたくないとか。そういうことじゃくない？みたいなの。

*..あー。なるほどね。

A…うん。

*…それも、Aさんの中で、4月に就職してから、ずっと続けてたことなの？

A…そうそうそう。言ったんだけど、結構あたしも2011年度まではアグレッシブだったから、結構。再三言ったりしてたんだけど、もう駄目だね。2012年度ぐらいからもうやる気なくなった。

*…そうなんだ。

(3) 文化的慣習の相違―都会と地方のカテゴリー

Aは上に挙げた状況を打破しようと思念に努力したが、文化的慣習の相違を理由に挙げて、努力をすることをあきらめたと語った。ここでAは以前働いていた某民間企業に働く人間としてのアイデンティティを構築し、その視点から、ハローワーク会津若松の事業内容、文化的慣習を批判することになる。ここでは、Aの感じたリアリティが地方と都会の区別を通じて見て取ることが出来る。ハローワーク内ではITを活用することが出来る能力を持っている人間がAしかおらず、東京で働いていた頃では、当たり前だと思っていたこと思っていた感覚が、ハローワークでは通用しなかったということを通じて、Aは都会と地方を区別して語る。ここでは都会と地方というカテゴリーが現実の行為を規定しているのか、また、都会の地方に対する優位性がどのように強化されていったのかということ、Aの語りから見て取ることが出来る。

A…色々ね、言われっぱなしじゃなくて、提案もしてるんだけど、なかなかその、なん

かその、縦社会の上下関係というかしがらみ？

*…あー。

A…なんか理由じゃないような理由。変な田舎の風習みたいなのにとらわれてるのが納得いかなかった。

*…あーなるほどね。それはその、Aさんが今まで仕事をしてたなかで、東京で仕事してたわけじゃん？仕事のやり方が全然違ったの？¹¹

A…全然違うよ。こっちはさ、なんかあったらさ、すぐ会議とかさ、フレキシブルにできるし、情報共有とかも、なんていうんだろ、そういうわけの分かんないさ、そういうなんとか部門に通すにはこういう手続きが必要とか、上下関係がどうかとかさ、そんななかったからさ、お互いベストなものを目指すためにはどうしたらいいのかって言うのを考えて行動してたからさ。

*…なるほどね。そういう個人的事情みたいなのは捨象して、東京で働いてた時は共通目標に向かって仕事してたわけでしょ？

A…まあそうだね。

*…こいつが嫌いだから仕事したくないとか

11

A…そう県が嫌だからとか、そうそう

＝

*…そういう個人的な感情は、ああなるほどね。けど、福島県では、そういうなんか、

＝

A…田舎の縦社会みたいな。県がとか、国がとかさ。

*…ああなるほどね。

A…で、相手の役職とかも見る。どうせこれは課長補佐でしょ？とか。なにそれ？みたいな。

*…なるほどね。そっかー。

A…たった一つの会議をするのにさ、ものすごいさ、なんかこう伝達文書だったり、承認もらってとかさ、会議一つするのに、ものすごいステップ、許可をもらうとか、そう　　いう煩雑な手続きがいっぱいあって、引いたね。

*…ああ。

A…普通になんかさ、民間にいたから、メーリングリストとか作って、一発で情報共有とか、何時から会議するけどいいですかとかみたいな感じでできるのに、なにか一つの話し合いするのに、無駄と思えるような手続きをしすぎるみたいな。

*…あっそうか。メーリングリストもないからいちいちみんなに

＝

A…そう、ファックスと電話みたいな。ふざけんよバーカみたいな。

*…そうなんだ。へえー。

A…ITレベル超低いよ。

*…あーそうなんだ。あーそうか、インターネットも使える人も少ないわけだ。

A…そう。メールってなんですか？みたいな。メールを送ってから電話くださいって言うてるんだよ。普通さ、そんなさ、電話でれない時にさ、メールとか送れるからメールの良さがあるわけじゃん？

*…うんうん。

A…ふざけんよって。なんでわざわざ電話しなくちゃいけないのみたいな。

*…なるほどね。

A…それぐらいメールチェックするとか、そういう習慣もないし。

*…あー。それはAさんは働いてる社員の中では若い方だったの？かなり。

A…あー。若い若い。そうだね。下から二番目とか。

*…あーそうなんだ。結構おじさんやおばさんが多いの？

A…そうだね。

*…じゃあアナログ世代が多いわけだ。

A…そうそうそうそう。まじで使えないんだ。そういうさ、仕事のやり方も知らないんだよ。すつとさ、事務手続きしかやってきてないからさ、型にはまった仕事

しかわかんないみたいな。

*..あー。なるほどね。

A..あとき、仕事もこうさ、効率的にやるとかさ、そういうのも頭が回らないんだよね。どうしたらいいとか。

*..あー。

A..ずっと昔のやり方が踏襲されてるんだよ。

*..あーそうなんだ。だからあれか。Aさんとしては、けっこうさ、仕事にさ、前話してた限りでは暇だったと感じてたわけじゃん？その時間を有効活用したいとは思わなかったの？

A..私？

*..うん。

A..思ってたよ。だから自分で仕事をつくることをしてたよ。積極的にさ、ハローワークからも仕事を提案していった、なんか新しいことをやっていけないか？っていうふうには思ってた。だからそう。だからまず私、前の会社がマーケティングだったのもあって、まず調査をしないとわからないなと思って。どんなニーズとか。

*..あー。なるほどね。

A..そうそう。

*..だけどその調査はやらせてもらえなかったわけだ。

A..そうそうそうそうそう。

*..あー。なるほどなるほど。それで不満がたまっていたと。

A..そう。上司の自己満足。

*..そうなんだ。(.)会議はさ、大熊町の役場とやってたの？

A..そうそうそう。会津に避難してる町民がいる役場だから、大熊町とか、檜葉町のたちとか。

*..うんうんうん。役場の人たちと。

A..そう。会議っていつても、お互いどうしたらいいかっていう、議題みたいなのものいからさ。

*..えっ？ないの？

A..作ってもなんかさ、まだちょっとわかりませんみたいなの。

*..どういう会議だったの？

A..やっぱその就労支援っていう部分だから、

*..||いかにしてに就職させるかみたいなの会議？

A..そうそうそう。今なんかその、仕事に対して、被災者たちからニーズありますかとか。どう考えてるかとか、話聞いてますか？とか。

*..あー。そこで情報交換してるわけだ。

A..そう。でもあんまり向こうも調査してないからさ、自分の町民のことわかってない

んだよね。

*..あー。そうなんだ。アンケート調査は行わなかったの？

A..そうそう。それをやりたいて言っただけど、駄目だった。

*..あつそうなの？へえ。

A..自治会長に話を聞くぐらいだったらいんじゃないんですかとかいって。

*..そうなの？そうなんだ。じゃあ正直な話さ、社会貢献というか、その、なんだ、改善するにはどうしたらいいかとかさ、

A..うん。

*..生産的な話はぜんぜんできなかった？

A..うん。できないできない。みんなさ、そう、役場の人とかが、当の役場の人とかが、

東電から保証金もらってますからとか。

*..あー。じゃあほんとに全部受け身というか、あきらめというか。

A..そうそうそう。

*..あー。なるほどね。

A..やる気のある人はハローワークに行ってますよみたいな。

*..あー。なるほどね。そのやる気を出させるにはどうしたらいいかとか、そういうふうには考えなかったわけだ。その、やる気のある人はハローワークに来ればいいし、やる気のない人はそれでいいっていうスタンスか。

A..そう。

*..なるほどね。けどそれも実地調査も行わずに決めたことなんですよ？

A..そうそう。だからね、そう。実地調査をしてないってことが一番不満だったかな。

*..あー。

A..だってね、方向性も立てられないじゃん。すげーむかついた。自分の街のことだったら大熊町の方から言っこないといけないとか。そういうことばかり言ってるから先に進まないんだよ。

*..なるほどね。

A..自分たちで案を持ってきて、こういうのがありますみたいなことを言ってくるならいいですみたいな。

*..なるほどね。大熊町から働きかけてくれないと、やる気ださないぞみたいな感じか。

A..そうそうそう。向うから言っくれないとか。

*..なるほど。

A..馬鹿じゃん。言っこないからこつちから動くしかないじゃん。

*..そっかさっか。それはあれなの？借り上げ住宅の相談窓口を開設したときからずっと続いたことなの？その不満というかさ。

A..うん続いたよ。

(4) 2012年度の事業内容

2011年度はAの仕事に対するモチベーションが高かったため、積極的に行動を起こしていたのだが、2012年度に入ってから、仕事に対するモチベーションは失われていたという。

当初は仕事を2013年の3月まで仕事を続ける予定であったが、妊娠という個人的な事情により、急遽10月に退職することが4月に決まった。この決定が、ハローワークの被災者特別支援事業にとっても、Aにとっても、事業に対するモチベーションを失わせる要因となってしまった。

Aが予定通り2013年の3月まで仕事を行うという約束を守れなかったことで、Aを中心とした被災者支援事業の計画が頓挫してしまったのである。というのも、特別支援事業内では、パソコン操作や、データベースをつくることのできる人材がAしか見当らず、2013年度の秋頃から予定していた、被災者支援セミナー用の資料やプログラムの作成をすることができなくなってしまったからである。

事業計画が頓挫してから、仕事内容は失業保険の給付が切れた人に対して、電話調査を行い、就労の案内及び求人表の送付を行うという新しい仕事の他は、2011年度に行われていた、とルーティンワークが主な仕事内容であったと語った。その仕事に対してAはどのように思っていたかと尋ねると、以下のように語った。

*..その仕事をしてどうだった？

A..もうこんなことに金を使わなくていいと思った。国は。

*..あー。国が？

A..被災者支援とか。だって別に、専門の部門を立ち上げなくたって、ふつうの一般の人たちが来る窓口だけでいいじゃんみたいな。結構被災者の人たちも、特別相談窓口に来ないで、普通の一般の窓口に行く人も多いから、本当に仕事をしたい人は、別に一般窓口にいっちゃう人が多いからさ。

*..あっそうなの？

A..うん。そっちの方が早いからね。すぐ自分で求人を見つけてきたりとか。

*..えっそうなの？えっ？じゃあなんで、Aさんたちのやってる仕事の意義は何だったの？意味ないように思えるけど。

A..あのね、物理的な環境も悪かったんだよ。(地図を書いて説明し始める)うちの窓口って、ハローワークシステムっていう求人票とかみられるパソコンがあるんだけど、それが、本庁舎にある場所にあって、一般窓口の方しかなくて、求人票を見なかったら、わざわざ震災窓口のある建物をでて、本庁舎までいかないといけないのね。

*..あー。なるほどね。

A..それが、すごい被災者の人たちにとってめんどくさかったりして、

*..あーなるほどね。建物がもともと分かれてたんだ。

A..物理的に離れてるんだ。

*..じゃあAさんがいた建物は、簡易的に作られた事務所だったの？

A..リそうそうそう。建物自体は普通の事務所を借りたやつなんだけど、ただ、ネットワークシステムは本庁舎とは同期してないんだよね。

*..えっそうなの？

A..なんか、本庁舎の環境が、私たちの建物にはないから、ただ、なんか、話を聞くだけの事務所なんだよね。

*..あー。あるほどね。

A..ただ、いざ結構業務って、パソコンにデータが入ってるから、パソコン見ないと駄目なんだけど、パソコンは私たちの事務所にはないから、

*..あー。

A..わざわざ本庁舎に行かないといけないみたいな。

*..あーそうなんだ。

A..それがね。被災者の人もね結構。||

*..||手間がかかってたわけだ。めんどくせーって。

A..そうそう。だったら最初から一般窓口でやるわみたいな。

*..あーなるほどね。てかさっち(一般窓口)で対応してくれるわけなの？

A..もちろん。一般窓口でもできるんだよ。全然。

*..そうなの？じゃあそっち(一般窓口)で対応してる社員さんは、特別相談窓口に行ってくださいって言わないの？

A..言わない。

*..あっ言わないんだ。

A..こっち(特別相談窓口)はさ、ゆっくりね、カウンセリングっていうところに重点を置いてるから。

||

*..重きを置いてるから。

A..そう。まず、こっちは(一般窓口)は即紹介なのね？

*..うんうんうん。

A..すぐ求人票もってきたら、すぐ紹介しますっていう感じで。

*..うんうん。

A..こっち(特別相談窓口)はまず、||

*..||心のケアから入るんだ。

A..そう。まず話聞かせてくださいみたいな。結構すぐ仕事をしたって言ってきた人は、こっち(特別相談窓口)きたら、前の上司のやり方で、あの日はどうでしたか？とか。つらいですか？とか。家族はどうですか？とか。

- *..うんうん。
- A..そういう身の上話みたいなどころから始めるんだよ。
- *..じゃあ結構深刻な悩みを抱えてる人たちがAさんの窓口に来てたわけでしょ？
- A..来てほしいと思ってたんだよ。
- *..ああ思ってたんだけど、来なかったの？
- A..りまあそういう人もいたっちゃいたけどね。
- *..うん。いたけど、別にそんなに数は多くないというか。
- A..そうそうそう。やっぱりハローワークっていうさ、看板掲げてる以上さ、来る人もさ、身の上話を聞いてほしくて来るんじゃないかってさ、やっぱりさ、どっかしらさ、仕事っていう意識があつてくるからさ、いきなりこっちがさ、メンタルヘルス相談をするつもりでいても、相手がそういう心構えで来てるかっていうところで一致しないよね。
- *..あー。そうだね。じゃあもうそもそもさ、その被災者の人たちは、Aさんたちの仕事、カウセリングの仕事だつて言うふうには思つてないわけ？
- A..そうそう。だからこっちは、相談者達の話拾つて、心理的な部分を引き出し、ましようつていうことを。もうカウセリング研修ばっかりやつてたから。
- *..あーそうなんだ。
- A..超カウセリング研修ばっかだよ。
- *..へえー。けどそれ実地調査もないのにカウセリング研修ばかり受けてんだ。
- A..そうだよ。カウセリング勉強会ばかり。
- *..そうなんだ。
- A..カウセラーの試験受ける受けるつてすごい言われてた。
- *..へえ。じゃあそれ一方的な憶測に基づくやり方だったんだ。
- A..そうだよ。被災者は悲しいとか、つらいですつていうのが前提だったよね。心が病んでますみたいな。
- *..なるほどね。実際に心が病んでる人たちはいたわけ？
- A..泣く人とかもいたけど、やっぱりさ、はじめて会った人にそこまで感情を曝け出す人なんかいないよね。
- *..そうだね。いないよね。(.)うん。いないね。そらそうだよ。だつて、やっぱり仲良くならないとね。
- A..そうそうそう。だったら別にハローワークじゃなくなつてさ、同じ集会所のおばさんと話し合つてるとかさ、別にわざわざハローワークに話すまでもないと思つてる人がいるんじゃない？
- *..あー。

(5) 臨床心理士を雇う

2012年度の4月からは、2011年度の教訓から、被災者特別相談窓口で、臨床心理士を雇い、メンタルヘルス及びカウンセリングのイメージの強化を図った。相談者にとって、特別相談窓口は、メンタルヘルスを行う場所であるとの認識を植え付けたかったのだが、相談件数はあがらなかったようである。

A：2011年度も臨床心理士とかを雇いたかったんだけど、人が見つからなくて、一応産業カウンセラーの資格を持つてる人もいたけど、行政書士を雇ったのね。法律相談がきつと多いはずだとか言ってる。

*：あー。なるほど。

A：実際はそんなに相談しに来る人はいなかったんだけど。で、2012年度は、ずっと切望してた臨床心理士が見つかって、雇ったんだけど、案の定ね、臨床心理士って看板だと、もう明らかにカウンセラーがいますっていうことで、そういう相談者を狙ってたんだよね。

*：あー。

A：こつちだっけさ、あくまでも職業相談員って掲げてるからさ、あんまりさ、身の上手話してこないけど、臨床心理士ですって言う看板掲げると、もうなんかそういう話を聞いてくれる人なんだって認知されるじゃん？

*：うんうん。

A：そういうのを期待して、

*：あー期待してたんだ。

A：だけど、来なかった。

*：来なかった。あー。

A：臨床心理士の人はすごく熱心な人で、まあ一応ね、月に一回は我々と一緒に、一応被災者の予算取ってるから、仮設住宅に行かないとまずいだろうっていうことで、月に一回ぐらい行くんだけど、まあ全然人来ないから、先生は考えて、例えば、体のリラクゼーション体操とか、ヒーリング講座とかをね、イベント考えて開催したんだけど、もちろん事前広報はしてるよ。

*：うんうん。

A：けど誰も来ない。

*：へえー。そうなんだ。それやっぱ1日1人とか2人とかしか来ないわけだ。

A：0から1人とかかな。

*：あー。なるほどね。

A：臨床心理士の先生は、超暇だったよ。先生戸惑ってたもん。

*：へえー。先生は東京から来た人なの？

A：郡山の人だよ。もともとは関西人なんだけど、夫が郡山赴任になったから自分も来ちゃったみたいなの。

*..女の先生なんだ。

A..私と同じ立場だね。女の先生。

*..へえー。そうなんだ。その女の先生は何か言ってこなかったの？やり方変えまじょうとかさ。

A..もつとなんかいろんな企画を考えようとか、人が集まれるような企画を考えただけだね。体操とかヒーリングとかいろいろやったんだけど。考えてアイデアだしてくれただからこつちも周知したんだけど来ないんだよね。

*..あーそうなんだ。その来ない理由は分析しようとは思わなかったの？来ないからしやうがないなって、それで終わり？

A..そうだね。分析しなかった。たまたまね、そこらへんにあるいてたおばちゃんがいだから、聞いたんだ。一緒にやりませんかかって言ったら、誰もやらないよって。

*..そんなのやらないよって？

A..興味ないよとか。

*..仮設住宅にいた人たちは何に興味があつたんだろうね。

A..結構ね、草鞋を作ろうとかっていう、イベントには参加してる人はたくさんいたね。漬物漬ける会とか。

*..あー。

(6) いわきに戻りたい被災者

臨床心理士を雇って職業支援を行っても、相談件数は2011年度と変わらず、Aは被災者の関心が職業相談に向いていないと、感じていた。その理由として、就労への意識よりも、東電の補償に対する関心が強いということ。そして、会津若松市は一時的な避難先であるという被災者の意識があり、浜通り（福島県東部地域を指す）へ戻ることが前提になっているので、会津若松市内で職を探そうとしないこと。そして、今後の見通しが不明であるということから、対策をとることができず、就労する以前の問題であると感じている人がいるということをAは語った。

A..要はあんまりその、どうも職業相談とか、そういうものには、まだ意識が向かわないのか、

いのか、

*..関心がないのか

A..そうそう。あと東電の保証の話とか。

*..東電の保証の話は2012年度もずっと話してるの？

A..うん。してる。してるよ。定期的に來てるもんあの人達。

*..あつそうなんだ。

A..そういうのは毎回熱心に來てるよ。なんか東電が発行した、賠償請求するための手続き書の書き方がわからなくて、聞くために來てるよ。

*.. あっそうなんだ。

A.. この賠償請求の書類が電話帳ぐらいの厚さでさ、細かいんだよ。どこで何買ったとか、領収書はってとか。

*.. へえー。そういう書類を全部書かないとお金は払いませんっていう感じか。

A.. そうそう。ただ、詳しくは教えてくれないんだよね。どうなってるのかは、詳しくはわからない。

*.. あっそうなんだ。へえー。とりあえずそういう説明会にはたくさん人来るわけだ。

A.. もちろんもちろん。だってお金がかかっているもん。まずはね、みんなけっこう中には、東電の補償が落ち着いたらとか、まだその請求も確定できないのに、なんか、就職する気にはならないみたいなの。

*.. あー。

A.. けっこう被災者の人って、領収書捨てちゃった人はたくさんいるのね。

*.. うんうん。

A.. どのホテルに泊まったとか、何食ったとか。

*.. うん。

A.. でも東電は領収書ないとだせないとかって言ってるから。当然被災者の人は怒って、領収書なんて捨てちゃったよって言って、そこらへんのいざこざを、司法書士の人と一緒に相談しながら、どうやって請求するかっていうのをやってみたくて、そこらへんで忙しいんだって。

*.. へえー。じゃあ皆そっちのほうに関心が向かってて、ハローワークの方には関心が向かわなかったのかな。

A.. まだその、仕事っていうところの認識までいってないのかもね。まだ休業中の人もいるし、あの、会社が原発事故にあって、

*.. ーあー。休業中で、臨時で会津に来てるんだっていう感じ？

A.. そういう人もいるし、当然離職しちゃった人もいるけど、まだ、いわきの方に住みたいんだけど、あっちゃってバブルなんだよ。みんないわきに住みたいから、家が多分なくて、不動産が。だからいわきで家を見つけるまでは就職できないみたいなの。

*.. あー。そうか。もういわきに戻るのが前提だもんね。

A.. そうそうそう。

*.. そっかー。会津若松で永住しようって思ってる人は少ないんだ。

A.. 少ないね。

*.. 少ないっていうか、ほとんどいないんでしょ？

A.. ほとんどいないね。(・) そうだね。まああとは旦那さんがむこう(いわき)で働いてる人も多いし。

*.. あー。そうか。それは原発関連の仕事とか？

A.. そうそうそう。

*..へえー。そうなんだ。じゃあハローワークって言ってもそんなにじゃあ!!

A..川津のハローワークはニーズないんだけど、ただね、いわきのハローワークに聞くと、凄く忙しいって言ってた。

*..その違いはなんなの？

A..やっぱりいわきだとき、彼らはさ、いわきで永住しようっていう意識があるから。

*..うんうん。

A..もしくは、大熊町に戻ったとしても、いわきまで通勤できるからさ。なんかもう、いわきで働くんだっていうね。

*..あー。

A..だから忙しい。

*..あっちが故郷だっていう意識かな。

A..そうそうそう。大熊町じゃなくて、檜葉町の人なんて、檜葉といわきはとなりだからさ、いわきにまず住んで、檜葉町には昼間だけ帰れるから、とりあえずいわきに行ってみたいな。

*..あーそうなんだ。

A..とりあえずやっぱり、浜通りに、まずいわきに。

*..いわきに行きたいんだ。郡山ではなくて、いわきなんだ。

A..そうだね。だから忙しいらしいよいわきのハローワークは。

*..へえー。

A..だって1日10人以上来るって言ってたもん。

*..あっそう。それって忙しいんだ。

A..仮設住宅だけでもね。

*..あーそうなの。あーそうか、じゃあそれだって一回相談一時間ぐらいかかるんですよ？凄く忙しいよね？

A..そうそうさばけないとか聞いた。

*..いわきにも仮設住宅はあるしね。

A..いっぱいある。あっちは凄く忙しいよ。

*..いわきのハローワークとは情報交換はしなかったの？

A..してないんだよね。それが。

*..してないの？それはしようとも思わなかったの？(；)そういう話はでなかったの？

A..でなかったねそういえば。やっぱり管轄外みたいな意識があったね。

*..意識があった。あー。

A..会津にあくまでもいる人を対象で、いわきの求人情報とかは貰ってたりはしてたけど。いわきで仕事したいって言う人には、いわきで仕事したいって言う人がいたら、いわきのハローワークから求人票を見せたりとか。

*..あー。そうなんだ。へえー。

A…まあそうだね。

*…なるほど。

A…残念ながら、あんまり会津っていう土地で、そこで仕事を見つけていこうっていう人はそんなにいなかったね。

*…逆に会津に住みたいって言ってる人たちは、どんなことを言ってたの？

A…やっぱり子供がいる人で、子供が慣れたから、会津の学校に。だから、子供を優先してこっちに住みたいな。

*…あー。なるほどね。子供がもう帰りたくないというか。

A…そうそうそう。

*…じゃあ比較的若い世代の人たち？

A…あーそうだね。小学生の子供がいる人とかだったから。

*…小学生とかね。

A…いわきに行きたいって言う人も多かったけど、一番多いのが、今後のことはわからないって言う人かな。どこに住めばいいのかもわからないって言う人が一番多かった。

*…あー。

A…どうすればわかんない。住む場所が決まらないって言う人が一番多かった。

*…一番多かった。

A…そうだね。どこに住めばいいか分からないから、仕事はまだ見つけられないっていう人が多かった。

*…なるほどね。それは仮設住宅に住んでる人？

A…借り上げも仮設も両方だよ。やっぱり、会津で今後も住むのか、ほら、大熊町の役場は仮のまち構想⁽⁴⁾を練ってて、いわきに住むことになるのか。もしくは、第三の場所に住むのか。今自分たちはどうすればよいのかって。

3. 就労支援事業を振り返る

(1) 震災特別窓口の正当性

インタビューも終盤に差し掛かったころ、Aに1年半にわたって就労支援事業に携わってきて、どう思ったのかということを探ねてみた。Aは就労支援に携わる人間というアイデンティティから、被災者の抱えている問題が複雑であり、就労支援は、被災者の見直し、生活基盤が整ってから行うべきではなかったと語り始める。また、被災者の情報が不十分であり、被災者の視点から事業を展開することができなかったことから、震災特別窓口の必要性に疑問を感じ、結局は税金の無駄遣いではなかったのかという不満へと変わり、最終的には仕事に対するモチベーションを失ってしまうという流れになってしまった。

*..へえー。そっか。じゃあAさんが今まで1年半ぐらい働いてたんだっけ？

A..そうだね。

*..そっかあ。(.:.)一年半か。(.:.)その、どうだった？1年半働いてさ。

A..なんかさ、こっち。(.:.)なんだろ。思ってるより、複雑なのかなって思った。そのやっぱ被災者の抱えてる悩みっていうのが、やっぱ就労支援っていうところで携わったけど、やっぱ、まず住む場所が決まらないとか、東電の補償の処理をしないといけないとか、いろんな要素が複合的にあって、まだ、就労支援っていうのが、早いのかなって。

*..あー。

A..もうちょっと調査して、フィールドワークして、本当に被災者の人も言ってたけど、段階的に処理していかないと厳しいって。まず住むところが決まってるか。だから

「」

*..生活基盤が安定してないっていうこと？

A..そうそうそうそうそう。まあ一部ではね、就職って言うのはね、いずれは絶対出てくると思うけど、なんかもつといいアプローチがあったんじゃないかっていうね。

*..そのいいアプローチっていうのは？

A..それがわからなかったからフィールドワークしたかったっていうのはあるよ。何のデータもとれなかったから。

*..とれなかったしね。

A..あとそう。どうやってニーズが変化していくかも調査したかったから、定期的に調査もしたかった。

*..なるほどね。そっかそっか。

A..ちよつと情報不足だったかなって。ちゃんと調査してないのにやりだした感があったんだよ。もっとニーズに合ったもの出さないと売れないよねみたいなの。どうせ国から予算使ってるならもうちよつとねみたいなの。

*..そっかそっか。じゃあ予算を無駄遣いしてた感覚があるわけ？

A..あるある。

*..あつそう。

A..いらなくない私の仕事って、別にこれって。それだったら、ぶっちゃけ、この税金をもつと他の復興予算に使ってほしいとも思ったよ。

*..(笑) そう思っちゃったのか。

A..思った。うん。

*..そんなにじゃあ自分たちの仕事は」

A..自分たちじゃなくてもできたっていうね。要は一般の窓口の人でも、震災特別支援の支援の予算を使わなくても、ぶっちゃけ、ハローワーク会津の相談員の人数っ

て多いのね。一般窓口の人たちだけでもできたんじゃない？みたいな。

*..あー。

A..実はハローワーク郡山とか、いわきと違って、震災特別窓口ってないんだ。

*..へえー。

A..一般の窓口の人が月に1から2回程度時間を割いて施設を廻ってるのね。

*..うんうん。

A..そういう被災者の人がいたら別に個別に対応するとか。別に専門化してないのね。

*..うんうん。

A..それでうちらもよくないみたいな。

*..あー。なるほどね。それは常々思ってたことなんだ。

A..そうそうそう。わざわざ予算とってき、事務所まで借りて、大々的にやる必要なくないって。一般窓口でできることじゃんっていう。

*..なるほど。そういうことか。

A..お金もつたいなくないみたいな。

*..なるほどね。要するに全然機能してなかったわけだ。

A..そうそうそう。なんかさ、あるじゃんよくさ、公務員ってよくわかんない箱もの作っちゃって税金無駄にしちゃうパターン。それとまさに同じ。

*..まさに同じだと思っただけだ。

A..そうそうそう。

*..あー。そっか。

A..まあ予算に見合った価値を創りだすことはできなかったね。こっちの能力不足だったかもしれないけど、ただちよつとニーズもなかったような気がする。

*..あーそう。連携も不足してたっていうのもある？

A..それもあるね。ただお金だけがプールしちやっただ感じかな。

*..あー。そうなんだ。

A..うん。

(2) 都会と地方、民営と国営及び公営というカテゴリー

モチベーションを失っていった第二の理由として、都会に住む人間と地方に住む人間の慣習の差異性を強く意識し、会津若松の就労支援事業では、地方都市会津若松に対して拒絶反応を示してしまう結果となってしまう。Aは都会での生活習慣をその判断の準拠とし、田舎の非合理的な生活習慣を強く否定する。

また、Aは東京の民間企業で働いていた経験から、民間企業と国営施設を比較して、国営施設であるハローワークの事業内容、はトップダウンで事業内容がある程度決められるため、厚生労働省による指示に従うという、受け身の体質であるということを語り、民間企業に比べてフレキシビリティが欠如していると批判する。この語りでは、Aは都会に住

み、民間企業で働いていた経験をその判断の準拠として、都会と地方、民営と国営及び公営を区別しながら語っている。

A…一番ビビったのが、うちの上司が、大熊町とか檜葉町とか、いろんな町と合同会議をするときに、大安の日をとれとか言いだして、大安の日じゃないと駄目だった。

*…えっ？なんで？

A…はっと思つて。今までハローワークは外部と会議するときは大安の日でしかやったことないから、この日は駄目だとかいって。

*…ええ？

A…バグってるよね？

*…ええ？それは何でなの？大安の日が縁起が良いから？

A…縁起がいいから。うん。そういう日じゃないと駄目とか言い始めて、じゃあちよつとこの日無理なんですけどって言ったら、じゃあ次の大安は2週間後ですよって言ったら、じゃあそれでもいいって。馬鹿じゃない？緊急性よりも縁起を担ぐみたいな。

*…そうなの？

A…それにも私どん引きしたし。

*…そうなの？そんなつことあったのか。(；)じゃあもうそういう現状に啞然としたことが多かったのかな？

A…そうだね。私が会津に行つてどん引きしたのは、田舎のわけのわからない縦社会とか、風習とか、理解しがい変な、自分としては理解できないような理由で、本当に解決していかなきやいけない問題には後回しにしちゃうところが、なんか理解できなかつた。もつと、これを解決するためにはそんなこと言つてられないじゃんみたいなことがないっていうのが、だめだった。

*…ふーん。なるほどね。

A…メンツとかを守ったりとか。そういうのが大切なんだなって、こっちは、だから仕事が進まないんだよって。

*…そういうのを改善するにはどうしたらいいのかなくなっていう風には考えなかつた？

A…そこまでは思わなかつたんだよね。

*…あつ思わなかつたか。

A…こっちは凄くむかついたから、その必要性とかを訴えたんだけど、変な理由で、しかも固定観念持ちちゃてるからさ、しかも、民間のフレキシブルなやり方を知らないからさ。そういうものだと思っちゃってるからさ、なかなか改善されなかつた。前例がないことはできないみたいな。わかってくれないっていうか。昔からの習慣を変えたくないとか。むしろあなたがこっちに來たら、郷に入つては郷に従えって

言われちゃったからね。

*..そういうことを言われちゃったんだ。あー。

A..そう言われちゃったらね。私正職員じゃないから、まあいくら言っても厳しいところはあるね。

*..あーそうかい。

A..だからもう、無理だと思ったから、ぶっちゃけNPOとかに期待したほうがいいなとかって思った。

*..なるほど。要するに、民間企業の方が仕事に対して柔軟性があったいいんじゃないかなって思ったんだ。

A..そう。いいと思った。

*..役場やハローワーク人たちはずっと指示待ちだったんだ。

A..そうだよ。そう実地調査もしなかったしね。厚生労働省から言われたことしかやらない。

*..あつそうなんだ。えっそれさ、例えば、厚生労働省からどういふことを言われるわけ？

A..通達文書が来て、こういうことをやってくださいみたいな。

*..あーなるほど。じゃあそれに従って仕事をするわけだ。

A..そうそうそう。

*..ハローワーク側から新しい事業をやるっていうことは許されてるの？

A..ある程度は許容範囲なんだけどね。言われたことしかやらない人が多いからさ。

*..なるほどね、じゃあ受け身で仕事を続けてたんだ。

A..そう。面白くなかった。やっぱ民間とかNPOとかがそういう支援をやったほうがよかったよ。そっちに予算を回した方がいいと思った。全然ダメだもん。

*..じゃあハローワークの組織を改革するより、他のNPOとか民間が支援をやった方がいいって思ってる感じか。

A..うん。(NPOはハローワークと比べて)もっと柔軟性があった動けるんじゃないかと思うよ。

*..そっかさっか。なるほどね。

(3) 震災事業から離れる

Aはインタビューの一回目から感じていた、ハローワークの事業目的とその業務の実態がそぐわないことに違和感を感じ、それが不満に変わり、ハローワークの業務に対してモチベーションを失ってしまった。最終的に2012年は、震災復興に対する関心は薄れ、自分のキャリアが関心の対象となり、賃金をもらうことが仕事を続けるモチベーションになったと語った。

Aは結果的に地方の文化慣習にうまく適応することができなかつたと語り、また、Aは

自分自身に貫き通せるような信念がなかったのではないかと感じていた。事業目的を果たすために、Aの主張を辛抱強く周りの人間に説得させる努力をしなかったと語ったが、福島島の復興支援から積極的に関わることはもうしないと語って、インタビューが終了した。

*..Aさんにとって、1年半は何だったの？

A..もう東京に帰るしかないなっていう。

*..(笑)

A..もうだめだ田舎はっていう結論になった。仕事してても楽しくないみたいなの。東京帰って仕事しようみたいな。

*..なるほどね。

A..被災者支援でも東京のNPOとかが支援を行った方がいいって思った。

*..そういうことか。

A..だめだ田舎はって、もう諦めた。全然だめだった。

*..面白くなかった？

A..だって、私の同僚の職員ですら受け身だったもん。みんな新しいことをやることに抵抗があるんだよね。田舎の風習かどうかはわからないけど。なんか、同じことをやって安定してるのが良いっていうかね。

*..そっかそっか。

A..面白くないね。

*..面白くないんだ。

A..やっぱ、やばいなって。

*..あー。

A..もうどうでもいいって思ったもんこれぞ。

*..どうでもいいって思ったの？(笑)

A..もうちょっとね、どうでもいいっていうか、やっぱ東京からもっと前衛的な考え方を持ってる人が行って色々指導したほうがいいと思った。

*..そっか。

A..でも逆に東京からそういう人たちが来たりして、じゃあ大熊町の人たちが頑張るかどうかって言ったら、また別の話だけど。

*..そっか。そうだね。

A..2011年度にさんざん頑張ったから、意見も主張したしね。なぜそうしないといけないのかっていうのを、資料を作って訴えたのにさ、却下されて、なんか、そうだね、あきらめちゃったよね。2012年度はとりあえず金を稼ごうって切り替ったね。

*..切り替った。

A..被災者のためっていう意識はもうなかったかもしれない。

*..そっかそっか。それはでもそうだよなー。

A..うん。

*..そうになると2012年度はほとんど同じような毎日だった？

A..そうだね。

*..じゃあなんか、仕事の質は落ちた？

A..落ちた落ちた。モチベーションがないわけじゃん。なんか新しいことをやろうって
いう意識もなかったしね。

*..そっか。会議を開こうにも時間がかかるわけだしね。

A..生産性がないよね。なにか新しいことを創りだすとか、そういう目的のある会議だ
ったらよかったけどさ、特に何もない会議だよ。

*..情報交換？

A..そうそう。会議を開くまでの話じゃないだろみたいな。電話ですむだろみたいな。

*..そうなんだ。なるほどね。それがじゃあAさんの一年半の軌跡ですか？

A..そうだよ。軌跡だよ。2011年はいろいろ試行錯誤したけど、2012年はもう
いいやみたいなの。次の自分のステップを考えようって切り替えた。

*..なにそのステップっていうのは？

A..子育てとかさ、キャリアプランとかの見直しだよ。

*..なるほどね。

A..はつきり言って、大熊町とかどうでもよくなっちゃったよね。

*..どうでもよくなっちゃった？

A..ニュースも見なくなっちゃった。昔は2011年度の福島民報とか見て、一生懸命情報収
集してたけど、どうでもよくなった。

*..そっかそっか。

A..ほんとどうでもよくなった。

*..震災起きてからは、最初はテレビでも震災関連の番組やってたじゃん？

A..福島県ってね。テレビは5時ぐらいになると、突然福島県だけのニュースしかやら
ない時間帯があつてね。どのチャンネル回しても福島県内のニュースしかやらない
んだよね。まあ毎日震災関連のニュースはやってるよ。

*..へえー。

A..けどもうむかついたから見なくなった。

*..そうなんだ。

A..もう面倒くさくなった。こんな所には住みたくないみたいな。

*..なるほどね。もう福島に住むのは不幸としか思えない？

A..そう。もうどうでもいいお前ら。頑張ってくれて感じだよ。

*..あー。

A..お前から頑張ってくれて。

*..あー。なるほど。むずかしいね。やっぱり難しかった？

A..難しかった。

*..環境に適応するのはさ。

A..できなかった。郷に入っては郷に従えなかった。説得させることもできなかった。残念ながら。

*..あれでしょ？自分のやり方を主張して、それを通そうとすると、仲間外れになってしまうような感じでしょ？

A..そうそうそう。そこで貫き通せるものもなかったよ。

*..あー。

A..なんか頭いい人っていうか、器用な人は、うまく話を通せるじゃん？

*..そうだね。

A..それができなかった。技量不足だった。

*..話を通せないっていう時に、ちよつと感情的になってしまう部分が多かった？なんか、こいつむかつかつかか。

A..何だこいつとかっていって、自分であきらめちゃったよね。最初は頑張ってたけど、もっと辛抱強くやるとか、何回も説得するとか、そういう努力はしなかったよね。

*..そつかそつか。(.:)なるほどね。そういうことか。なるほどね。じゃあAさん将来的にはどういう生き方をしたいとか、この経験から思えることはある？

A..生き方？そんなことは考えてないけど、頑張ってください。福島の人っていう感じかな。

*..そうかー。(.:)それは、そうか。会津の人っていうよりも、福島の人？

A..そうだね。福島の人頑張ってくれて。

*..なるほどね。逆にI君(Aの夫)はどう感じてたんだろうね。

A..あー。どうだろう。

*..何も思ってたなかったかな？

A..大変だなんて言うぐらいじゃない？I君は被災者の人と接してないからさ。別に会津は別に被害を被ったわけじゃないからさ。I君が勤める会社も何も変化はないし、家を失ったわけでもないしね。特に何の被害もないもん。

*..あーそうか。そうだね。

4. まとめに代えて

Aのライフストーリーをもとに、語り手が実際に東日本大震災の復興支援業務として、ハローワーク会津若松で働いたと考えている実際の体験についての、体験的語りと、その体験を解釈し、Aの感覚と結び付けて主観的に構築された経験的語りを見てきた。Aは結果的には、会津若松市で過ごした1年間半の生活はAにとってつらい経験だったとしてライフストーリーを終えた。

Aがこのような意味づけを行った背景には、Aが体験したリアリティが被災者のニーズを調べず、ハローワークの被災者による一方通行的な支援内容に対するAの不満へと変え、非合理的な理由で業務内容が決まってしまうことに対する不満へと変えた。そしてこの不満をA自身で納得させるために、Aは都会と地方、民間企業と国営施設という区別を行い、これらのカテゴリから、地方に対する都会の優位性、国営施設に対する民間企業の優位性という見方で解釈し、Aの思考、行為を規定していったことがみてとれる。業務内容に対する激しい不満は、上に挙げた見方によって維持されていたことが、ライフストーリーを通じて理解することができる。

しかし、Aもインタビューの終盤に語ったように、自分の主張を他者に理解してもらえないように努力していれば、ハローワーク会津若松の支援業務も変わったかもしれないし、Aの1年間半の体験に対する意味づけも変化し、このライフストーリーもまったく別の物語となっていくのかもしれない。

Aによる体験的語りと、経験的語りの二つの語りは、全体から見れば語り手と聞き手との相互行為、相互発話によって構築されたものであるということをも、このライフストーリーを通じて見ることもできる。語りはその時々状況に依存し、また、文脈に依存する。聞き手の質問によって、ライフストーリーが規定されていくこともあれば、語り手の突然のカミングアウトによって規定されていくこともある。状況文脈に依存する中で、Aはハローワークの社員として語る時もあり、会津若松市に住む市民として語る時もあり、都会に住む市民として語ることもあり、状況文脈に応じて、様々なアイデンティティを変容させていったこともみてとることができた。

このように、ライフストーリーとして語ることは、体験をもとにした経験や社会的背景、文化的慣習を通じて、様々な解釈することができ、反省的思考を通じて様々な構築することができると。その意味では、ライフストーリーというのは、予め客観的な形で規定されている、つまり、1つの客観的なライフストーリーとして語られるわけではない。そうではなく、相互行為による構築過程の中でライフストーリーは形成されていくものである。

しかし、だからといって、ライフストーリーには普遍的な意味をもなった客観性を付与させることはできないというわけではない。なぜならば、Aが体験したリアリティは、やはり客観的事実として残るからである。ハローワーク会津若松で働いたという体験は事

実として残るからこそ、他者に伝えることができる、または、理解させることができるライフストーリーを構築することができたのである。

〔注〕

(1) 生活者という概念を理解するにあたって、まず、日常生活の世界とは何を明らかにする。日常生活の世界とは、アルフレッド・シュッツによれば、「われわれが生きてはるか以前から存在し、他の人々、つまり、我々の祖先たちによって秩序ある世界として経験され解釈されてきた間主観的な世界であり、また、今、われわれの経験と解釈の所与として与えられえいるような世界」(1980『現象学的社会学』p28 紀伊国屋書店)を指す。このことから考えられるのは、生活者とはこの日常生活の世界で生きる人々のことである。

また、生活者の概念を巡って学術的な分析を行った天野正子によれば、生活者の特徴として、「生活の全体性を把握する主体を指し」、「静的な形態ではなく、『生活者』へと生き方を変えていく一つのダイナミックな日常実践」を指す概念をあらわす。(['生活者』とは誰か―自立的市民像の系譜』p14 中公新書1996年)

両者の定義を参考にして、この論文においては、生活者という言葉をも、シュッツの考える生活世界、つまり、我々の経験と解釈の所与として与えられているような世界を前提にしながらも、私的な利害を基盤としながら、私をこえて創る共同領域としての世界へ関わろうとする人と定義する。

(2) ややデータは古いが、平成9年度に広報・安全対策交付金事業によって制作された、原子力とわが町(大熊町)の資料によると、昭和45年以降、大熊町の1人当たり分配所得は福島県内では第1位であり、以後(この資料は平成5年迄のデータしか掲載されていない)1位を保っている。

(3) ふくしま就職応援センターのホームページに活動内容が掲載されている。以下の文章はホームページの引用である。

東日本大震災等により離職された方等で福島県内事業所に就職しようと頑張っている県民の皆さんの就職と人材を求める企業を応援するために、福島県が県内5か所(郡山、白河、会津若松、南相馬、いわき)に設置した就労支援施設です。窓口相談や電話相談、各仮設住宅や借上住宅を巡回しての個別相談などを実施しています

(4) 大熊町が2012年の3月に、町民代表と町職員若手によって組織された復興計画検討委員会によってまとめられた「仮の町」構想のことを指す。

仮の町構想によると、大熊町は役場機能や小中学校などの教育施設を、5年後には会津若松市からいわき市周辺に移すことを目標としている。

表案では、町の復興の基本的考え方として、4つの方針を掲げている。これは①町の除染を行い、将来、自然の大地を取り戻す(目標10年後)②町大川原地区の除染、治安維

持の拠点を設ける（目標2年後）③いわき市周辺に拠点（仮の町、町指定地）を設ける（目標5年後）④会津若松市の現拠点の維持強化を図るという方針である。

このなかで、いわき市への「仮の町」設置の背景には、大熊町から比較的近く、気候が大熊町に似ていることが挙げられる。

◆参考文献

- 桜井厚 2002 「インタビューの社会学―ライフストーリーの聞き方」せりか書房
- 天野正子1996 『「生活者」とは誰か』中公新書
- アルフレッド・シュッツ 1980 「現象学的社会学」紀伊国屋書店
- ガーフィンケル・ハロルド他 2004 「エスノメソロジー―社会学的思考の解体」せりか書房 新装第5版
- 桜井厚・小林多寿子編 2005 「ライフストーリー・インタビュー―質的研究入門」せりか書房
- ジェームズ・ホルスタイン、ジェイバー・グブリアム2009 「アクティブ・インタビュー」せりか書房

◆参考資料

みんゆう Data Book2012 福島民友新聞社

原子力とわが町（大熊町） 平成9年度広報・安全対策交付金事業によって制作

◆参考URL

福島県ホームページ

http://www.ems.pref.fukushima.jp/pcp_portal/PortalServlet?DISPLAY_ID=DIRECT&N_EXT_DISPLAY_ID=U000004&CONTENTS_ID=13873